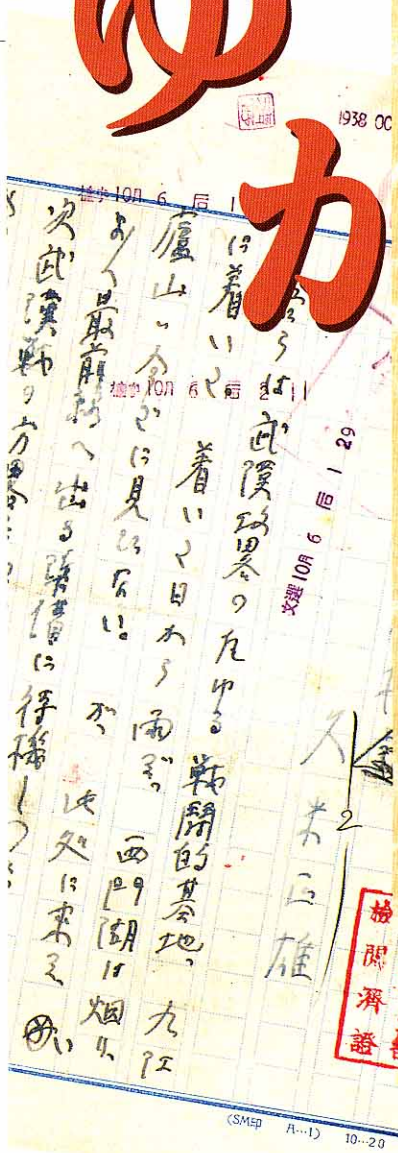
ふくしまゆかりの文学者たち



高山樗牛（たかやま・ちょぎゅう）

明治四・一・一〇～明治三五・一二・二四、本名林次郎、山形荘内斎藤親信の二男。伯父高山久平の養子。久平は県令三島通庸に従って県庁勤務、福島西裏五丁目小倉長屋第六号に住む。福島中学校（現安積高校）在学中父の転任で上京。『美的生活を論ず』等の作品がある。

小林美代子（こばやし・みよこ）

大正六・三・一九～昭和四八・八・一八、岩手県生。保原高等小学校を一年で中退。自己の精神病院での体験に基づく『髪の花』で群像新人文学賞を受賞。人間の心の弱さの中にある生の意味を描く作家として、期待されていた。

服部撫松（はっとり・ぶしょう）

天保一二・一・一五～明治四一・八・一五、二本松生。二本松藩の儒者で、戊辰の役後、東京に出て、戯作をはじめ多くの雑誌などを発刊した。

久米正雄（くめ・まさお）

明治二四・一・一・二三～昭和二七・三・一、長野県生。父の自殺で母の実家郡山で育った。『三浦製糸場主』『牧場の兄弟』『破船』『父の死』や若松・猪苗代湖が舞台となった『受験生の手記』等がある。

3 滝口入道

小説　高山樗牛　明治二八年（一八九五）

読売新聞の懸賞小説二等に入選。一等なく新聞に一八九四年（明27）四月から二三回掲載された。匿名発表で作者は帝大（現東大）学生某氏となっていたので話題となる。『平家物語』を材料として美文調の擬古典体の哀感的作品。主人公の斎藤滝口時頼と横笛の悲恋の物語。主人公時頼は「是の時二十三、性闊達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ、武骨一辺の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣抜懸けの誉ある功名談」の中で育った。この時頼が年令一六の「緑の黒髪後にゆりかけ」「閑雅に臈長け」た横笛に激しく恋心を持つが結ばれず仏門に入り滝口入道となる。横笛も尼となり病死する。

24 繭となった女

小説　小林美代子　昭和四七年（一九七二）

孤独のうちに小林美代子はアパートの一室で、ひっそり自らの命を絶った。その前年に、今までの人生を回想しつつまとめたのがこの小説。小学生の克美（美代子がモデル）の家は岩手県釜石でお茶屋を経営していたが、ある事情で父母の故郷伊達郡保原町へ引っ越して来た。しかし、その日が一家の不幸と没落の始まりであった。「七夕の朝、明けぬうちに阿武隈川で髪を洗うと、乙女は美しくなると言われていた……水を手で幾度も掬っては根元に掛ける。朝の冷気の中で水はしっとりと頭にまつわる」。悲惨な境遇の少女克美を、福島の清冽な自然はそっと優しくつつむ。

27 東京新繁昌記

戯作　服部撫松　明治七年（一八七四）

文明開化の波に洗われつつある明治初年の東京を「学校」「新聞社」「牛肉店」などの項目にわけて紹介したもの。内容は会話のなかで、ふざけ、おどけなどを縦横に駆使して物語風とし戯作の妙味を出す一方、痛烈な社会批判を試みた。当時の有名出版社・山城屋から出版、一万部以上の大ベストセラーとなった。

35 阿武隈心中

戯曲　久米正雄　大正五年（一九一六）

三幕物戯曲。場所は「東北地方の或る農村」阿武隈川の瀬鳴りの聞こえる阿久津留蔵の家は、現郡山市阿久津。農村の「一里ほど離れた町の、紡績の汽笛が鳴る」と背景に描かれたのは、郡山の紡績工場や煙草専売所といった近代産業、若者は農業を嫌って都会に出て行く。作男の久作が「ほんとの百姓ってもんは、おら等が代でお終ひだんべ」と言う。留蔵の次男留二が「おれが立派な百姓になって見せる」と応えるが、久作は「時世には勝てねえ」と言う。長男の留吉が東京から帰って来て、家を抵当に株で失敗した穴うめをしようとする。ことわられ阿武隈川に投身自殺。恋人お豊もあとを追う。叔父猪八も酒に酔い川に落ち死ぬ。久作は「これも時世のせゐだんべ。此頃のやうに軋み合っては、生きてられねえ」と言った。近代化の中で没落する農村悲劇。

36 貧しき人々の群・禰宜様宮田

小説　宮本百合子　大正五年（一九一六）大正六年（一九一七）

『貧しき人々の群』は安積開拓の中心地である開成山を舞台とした農村を描いた作品。作者の祖父中條政恒は安積開拓の指導者であり、今日の郡山の基礎を作った人物である。開成山もその座右の銘「開物成務」から。その祖父の事業を生み出した矛盾に気づき、貧しい者のない社会を希求する主人公の「どうぞ憎まないでおくれ。私はきっと今に何か捕へる。どんなに小さいものでもお互に喜ぶことの出来るものを見つける。どうぞそれまで待っておくれ」という叫びは、百合子文学の生涯を貫く思想となった。百合子一七歳の作『中央公論』発表。この作執筆の一九一六年、開成山に住む祖母と飯坂温泉に遊び、飯坂の風景を背景にして、郡山の没落農民の姿を禰宜様宮田